

守山の大事なことを考えられるポジションに俺はい

るんやと思うと、すごくそれが嬉しい

語り手 小森 慎也(守山市民ホール館長) 聞き手 福井 駿斗

立守との関わり

卒業生じゃないしな、僕。そやけど立守が立ち上がって、開学した時からずっとなんやかんやに関わらせてもらってる感じがかな。

—もう最初からですか。

そうそうそう。もう開学した当初から。

—それは理由とかあるんですか。

やっぱり一番、立命館守山って、元々大きなホールを持ってるわけでもないから、体育館もあるけど、ああいう感じじゃから、全校生徒いての、例えば入学式とか、卒業式とか、文化祭もそうなんやけど、そういうものをやるのうちのホールが一番近いしな、利用してくれはるっていうことになって。で、自ずとというか、元々、僕舞台関連の仕事をずっとやってたから、その中で、文化祭、卒業式、入学式、それぞれのそういう催し物に深く関わる機会が多かった。ずっと立命館を担当させてもらってたっていうのがあるのかな。

今となってはもう定番となるあすなる祭も、最初、当時立命館の担当の先生が、薄井先生っていう、もう今、立命館の大学の教授にならはったって聞いてるんですけど、その先生が相談に来てくれはって、この立命館の文化祭を立ち上げようと思ってる。あれ開学して、その年やった

かその次の年やったかちよつと覚えてないんやけど、「文化祭をやりたい」と。できればこのホールで、守山市民ホールさん借りて文化祭をやりたいんやけど、子供たちの思いに残りつつ、最終的には、立命館の文化祭ってすこいよね、そういうのにしたいみたいな相談に来てくれはって。で、その先生とああでもないこうでもないやりながら、三年生は、やっぱりクラス演劇をやらすんが一番盛り上がるんじゃないかとか、そういう今のあすなる祭の基礎を作ったというか、関わらせてもらってるって感じなんかな。だから、ほんまにそれ以外の行事でも、いろんなことで関わらせてもらってる。あすなる祭かな。非常に面白くて、あれに関わってるのは。

—教師になりたいとは思わなかったんですか。

俺は元々勉強ができるタイプでもなかったし、人に何か教えられるとか、先生になろうという発想というのは全くなくて、たまたま高校の時にバンド活動とかやってた関係で、音楽やつたり、スタッフの裏方なんかに興味を持って。その手の勉強をして、運良く市民ホールに入って。もう今から二〇、三〇年前か、平成八年に入社してるから、もう三〇年になりますね。そのうち二〇年間はもう立命館に関わらせてもらってるみたいな感じで。守山市民ホール入って何をしてたかという、大体裏方だから、舞台関連の仕事をしてる中で、舞台の使い方とか、そういう関係で、立命館入学式も卒業式も担当してたし、あすなる祭もそうやし、合唱コンクールとか、もう行事という行事には全て関わらせてもらってたかな、守山市民ホールの舞台の職員としてね。舞台の仕事は三〇年やってきて、もうここ最近では立場が変わって、今はもう守山市民ホールの館長という立場で仕事をさせてもらってるんです。今までは、舞台

現場のこと、だから利用者と、生徒たちと関わりながらやっていう仕事が多かったんやけど、今はもう現場離れちゃって、もっと広い視野で仕事をしてるというか。

今は何を主にやってるかっていうと、この地域の文化会館というものがこの守山市民にとつてどういう存在であり続けるかっていうところを研究してるというか、地域にもいろんな課題があつて、その課題っていうものを、文化会館として、どういう風にその課題に寄り添って解決していくるかっていうところを、今一生懸命、文化会館館長という立場で、その仕事をやらしてもらつて。ほんで立命館の子どもたちが、もつとこの文化会館っていうものを利用して、自分の中で新しい価値を創造できたりできへんかなみたいなことを、この間田辺先生とも喋つててんな。一応生徒にはそういうのをおろしてくれてはるみたいやけど、まだこの文化会館借りて私はこういうことしたいんですって言いに来た子は誰もいてないけどな。そのうちそういう子が出てきたりとかすると、我々も文化会館の人間としては、面白いことが提案できたり、関わり方ができたりすんのかなと思つたりしてんねんけどね。

守山市の課題

―守山市ってどんな課題があるんですか。

部活動が地域に移行されるっていう、なんか課題を聞いたことある？部活動の地域移行って言つて、要するに、一つは、少子化の問題があつたり、だからもう今、市内でも、いろんな環境で、一つの学校で子どもの数が少ないから、野球部九人集まらないとかさ。守山は、まだそんな田舎じゃないから、そうでもないんやけど。結構もう、滋賀県でも、北

の方行つたりとかすると、生徒数も少ないような学校では、一つの部活がもう成り立たないっていう。部活動が存続の危機やつていうのに合わせて、先生方の働き方改革。

学校の先生つてもものすごく忙しいから、部活動を先生が面倒見なあかんっていうことが一つの負担になってると、これは解消しないといけないっていう、その二つの理由があつて、もう部活動は学校から切り離していきましようっていう時代になって。まだ立命館なんかは私学やからまたちよつと捉え方が違うんやけど、まずは公立の中学校からもう部活動を廃止、学校から廃止していこうっていう今動きになって。

とはいえ、そんな急にはなかなかできへんし、今、改革集中期間とかいう時期になって、あと三年後には、まず土日がもう部活動、学校からなくなります。これは国が決定してることで。なおかつ一日二時間っていうのも決まつて、もうそんな状態やねん、学校の部活動って。だから、地域でいろんな受け皿を作つて、部活やりたいやつはそっちへ行きなさい、クラブチームに近いかな。今ですらクラブチームに行つてる子とかいるやん。それに近い流れになっていくんやけど。

でもね、部活動のスポーツの方はいいんですよ。受け皿がいくつかあるから。そやけど、文化の方っていうのは一切なくて、最たるものが、文化の方で言うと、吹奏楽部。吹奏楽部ってすごい部員たくさんいるのに、それが学校でも部活しませんよってなつたら、「え、私らどうするんですか」みたいな話になるやん。んで、そうやってきた時に、吹奏楽部の受け皿どうやって作んねんっていうので、僕、三年か四年ぐらい前にその課題に取り組んで、守山市民ホールで吹奏楽団を作つてん。

「ルシオール・ユース・ウインド・オーケストラ」っていう吹奏楽団を作つて、今活動四年目になるんですけど、吹奏楽部の受け皿を文化会

館が作るっていうのが全国で初めてやって、いろんなところから注目を浴びて、今は僕、あちこちから声がかかり「どういう風にされてるんですか」「どういう風な運営されてるんですか」言うてあちこちに呼ばれて、講演活動に回ってるんやけど。

そういうことやったりとか、本当に地域の課題、地域とゆうか、世の中の課題というか、そういう課題に、せっかく我々、文化ホールっていう立派な建物を持つて、それを運営しながら活動してる会社やから、その地域の文化会館として、どういう風に地域の課題に寄り添い、それを解決できるかっていうところを今一生懸命やってるっていうのが現状かな。

立守開学当初の時代

—昔の開学当時の立守ってどんな感じやったんですか。

やっぱ最初はね、生徒も少ないわけやん。一学年ずつ増えていくから。だから、今ほど活気もないし。ただ、学校が新しいし、なんかすごく新鮮やなっていう感じはもちろん受けてて。最初は元々守山市にあった守山市立守山女子高校が立命館に移管されたんやけど、まあその辺の最初の時期、うまいこと軌道に乗るまでは、ちょっと傍目で見てても大変やなっと思って。実際、立命館側の子どもの言葉も聞いたこともあるし、女子高校の子らの言葉も聞いたことあるし、なかなかもう大変っすよみたいな。でもその辺を上手に軌道修正しながら、先生たちの努力の甲斐もあって、徐々にまとまりつつあるというか。

三年ぐらいすると、なんとか立命館守山っていう、一つの新しいスタイルみたいなのが、確立してきて。

吹奏楽部とか各部活動もそうなんやけど、最初は人数がすごく少ないから、全然弱いよね。そらそうや一年生しかおらへんとかそんなんやから。それが、二年、三年とかでだんだん部員も増えてきて、四年、五年と、積み重ねてきはつたら、だんだん強い部活動も増えてくるし。そういう意味で、ほんまに基盤を作ってはるあの時期っていうのは、見て大変やなと思う反面、こうやって歴史つて積み重ねていくんやなっていうのを、なんとなく傍で見てて感じたな。

僕なんか子供らと深く関わるのは、あすなる祭でしか深く関わってなかつたけど、子供らといるんなコミュニケーションを取る中で、本当に子どもらの感じっていうのも、なんかだんだん変わっていったる気がするし、立命館の熱さみたいなものが、徐々に徐々に積み重ねていったところを目の当たりにさしてもらえたかな。

二〇年か。なんか早いな。もう俺からしたらもう二〇年経つかという感じやな。さつきも喋ったけど、最初の方は「たつ」としてたあの感じ。混沌としたあの感じから、もう二〇年経つのかっていう感じがな。

何より学校の方針として、基本的に子供が主体となつてやろうっていう感じやから。そういうところも面白かったりする。わざわざ先生が来て小森さんどうやこうやとかいう打ち合わせをしに来るわけでもなく、勝手に生徒会が来て、俺とのアポ取つて、こういうこと教えてほしいとかああいふこと教えてほしいとか言いに来るし、全部生徒が動くから、そういうのはすげえ面白いなと思う。他の学校そんなことないもん。やっぱ先生が主体となつてきはるから。そこは立命館の思いっきり特徴やな。子どもらが意識を持つて、全てにおいて子供らがやるっていう。最後の最後でなんか問題起こったら大人が助けるみたいな、そういう

うスタンスできてるから、それは面白いね。

今の立守生について

よその学校ではもちろん体験できへんことが立命館守山には詰まっているよな。それはもう、環境としては抜群やと思うわ。自分たちがやりたいことを探すというか、やりたいことを見つけるられる環境というものを、ものすごく、準備してくれた受け皿があるから、それはすごいなって単純に思うんやけど。

でも、一つな、立守生と関わって、ちょっと思うことがあって。これはあんまりプラスなことではないんやけども、立命館の子供たちって、学校がいろんな受け皿を用意してくれてたりとか、いろんな活動、体験をさしてくれるということ、大人がすごくいろんなことを用意してした中に飛び込んできて、自分たちがあみたい、こうしたいっていうことをやるんやんか。これって、ものすごいことやねん。そんな普通受け皿作られんから、他の学校は。

そやけど、逆に言うと、何もないところではちょっと弱いんちゃうかなみたい。用意してあることが当たり前というか、失礼な言い方なんやけど、それが当たり前から。だから「一から準備をしないとダメなんやで」っていうのを逆に教えることが多いというか。でも、それも一つの学びやと思うんやけど。

いつもは確かにどこへ行っても、いろんな環境が自分たちに用意をされてるけど、一歩外へ出れば、全然自分らのホームじゃなくアウェイに出たら、何も用意なんかされてないから。それを自分らが一から気づいて、自分らで用意していかねえかんねんぞっていうことをたまにこう

感じるものがあって、実際そういう風に言うんやけどね。そういうのはほぼほぼメリットしかない立命館やけど、デメリットがあるとするなら、そこなのかなと思うたり。全てが用意されてる環境にみんなもう慣れちゃってるっていうところがあるから、そこはそうじゃないんやでっていうところ、でもそういう意味でもあすなる祭とかっていうのは、そういうことを知れるいい機会やったりするのかもしれないけどね。

今後について

—今後もつとこうなつてほしいとありますか。

そうやな。今もルシオールアートキッズフェスティバルっていうイベントが年に一回、この守山市民ホールを中心に、立命館の校舎も使つてこの間も五月の一日にやったんやけど、意外と立命館にいてる中高生たちってほとんど知らんねん、そのイベント。自分の学校を使つて行われるにも関わらず。ほんで、学校の先生方もほとんど知らんねん。それがちょっと俺は寂しくて。

せつかく守山市民ホール使つて、立命館守山中高使つて、このあたり一体を使つていろんなイベントをやつてるんやから、もつとこの立命館の中高生も関わってほしいとか、先生方も協力してほしい、関わってほしい。時代には逆行してんねんで、先生方の働き方改革、土日部活やめよう言うてる時に、「先生、土日に来てくれ」言うのも逆行してるんやけど、ただ、年に一回ぐらいは協力してくれてもいいんじゃないですかね、みたいな。もつと地域と一体となったイベントができるといいなというのが僕の心の中の願い。せつかくこんなに大きな文化会館っていうものがあるんやから隣に、そこと学校とが協力し合った何かもつと大

きなイベントみたいな、それがまたなんか市民の皆さんが喜ぶような、市民に還元できるようなイベントっていうのが立命館とホールとで作れたらいいのになってすごく思うかな。

守山の課題にはな、こういう課題が他にもあつてなつて、「こういうことに寄り添える活動したらどうや」とか立命館の生徒と喋ってたんだけど、立命館の子らの中でも、そういう子らいると思うねん。社会活動というか、社会に貢献できるような活動を何かやってみたいとかな。今はそんな部活動ないやろうけど、そういう部とか、同好会というのが、そういうのが立ち上がっても面白いのかなと思ったりするけど。――でも実際、受け皿は結構あると思うんですけど、その受け皿に飛び込む人って本当に一部ですよ。

そろそろやと思う。だからな、半ば最初はな、強制的なことでもいいのかもしれない。年に一回だけでええから、そういうことやろうとかな。その一回が、なんか自分らの心を変えたりとか、考え方変えたりする可能性もあるし。やっぱり立守を選んだからには、まずは立守でしかできないことを一生懸命やってほしいし。そこに余力があるというか、また新しいことが考えられるならば、そういう地域とか、この学校外のところでの何か課題に取り組んでみようとか。そういうことを考えてもいいやろうし、そういうのがもつともつと広がっていくといいなというのが、まあまあ僕の願いというか、立命館の子ならできることなんじゃないかなと思ったり。まずはあすなる祭をもつとこうしようとかな。なんかそういうところから広がっていくといいなと思ったりするな。

そんな思いで二〇年間、立守と関わってきて。でも何がって言うたら、一番自分を成長させてくれたんは、やっぱり立命館守山っていうのは、これはもう僕の中にもほんまにあつて、あすなる祭という文化祭が

あつたからこそ、舞台技術者としてもいろんなクオリティも上がったし、感性みたいなものも上がったし、なんか一つの、一年間の中のなんかライフワークの一つでもあるしっていうところでは非常に楽しかったよね。今は舞台現場では関わることはもうないですけど、これからもまだ審査員として関わったりもするし、さっきも言ってたように、この施設を活用するという意味の部分でも受け皿を作りたいなと思ってるし。また末永くね。このホールに僕はあと長くても一五年ぐらいしかいてないんですけど。いる限りはやっぱり、立命館もつと上手に関わっていくことができると思ってます。

この企画について

――この「聞き書き」プロジェクトでは、卒業生だけでなく、立守と関わりの深い方々にインタビューをさせてもらっています。

そうか。ほんでたまに俺みたいに卒業生ではないけど、一応まあまあ関わりが深い人みたいな、紛れてるみたいな感じか。なるほどね。ほんでこれを福井くんは今俺が言ったことをこう元に、それまとめなあかんやん。大変やな。俺めっちゃ喋ったで、今。

――いやもう全然。めっちゃくちやありがたいです。

思いが強いねんな、ほんまに。俺、おじいちゃん、おばあちゃん、お父ちゃん、お母ちゃん、みんな守山出身で、これも言ってみりや守山の、もう純粋な守山人で、やっぱりその分、やっぱりその守山に対しての熱い思いやつたりとか、そういうのが人一倍強いというのもあるんやけど、それに加えて、この守山市民ホールという、守山市で言うたら文化の拠点とされる、シンボリックな建物で働かせてもらて。

それが今やもう館長という立場にまで来ると、一定この守山の文化の指針とか方針っていうのは、言うてみりや自分にかかってきてる部分もあるし、そういう中で、なんかすごく嬉しいとか。この守山で生きてきて、守山の大事なことを考えられるポジションに俺はいるんやと思うと、すごくそれが嬉しいし、やりがいあるし、ほんならやつぱり自分の思いもどんどん出てきて、もっともっとこうしたい、守山市をこうしたい、ああしたいっていうやつば思いがあるから。

なんか、もう日々そういうアイデアがな、バンバン出てくんのよ。アイデアとか、こんなんやりたい、あんなんやりたい、それをいかに、形にしていけるかっていうところが、これからの自分の課題やし。守山市長とかにでもなればさ、この守山をあほしい、こうしたいとかいうのもあるやろうし。もっとそれぞれの立場でそういうことを考えられる人もいるやと思うねんけど。

例えば、普通にどっかの会社で就職とかして、大阪とかに就職したり、東京で就職したりとかしてたら、もう地域との関わりなんて何もないやろうし。例えば守山に残ってても、守山のどっかの会社で働いて、なんか製造業とかしてても、この町のためとか、そんなことなかなかないやろうし、そういう意味では、幸運にもこの守山市民ホールという、市の文化の中心の建物のトップになれたっていうことで、自分が考えられる、この守山のために考えられるポジションにこれたっていうのが、非常にありがたいことで。そこにはもちろん、立命館の関わりがあったりとか、守山市との関わりがあったりとか、いろんな人たちとの関わりの中で、僕も今のこのポジションになれたっていうのでね、感謝ですね。どう？ もうそんな感じで、聞きたいこと、大体聞けた？

—はい。大体聞けました。ありがとうございます、本当に。

これがほんで記念誌みたいになんねやな。
—そうです。

—それできるの楽しみにしてるわ。

—はい。完成したら送らせていただきます。

—わかりました。ありがとうございます。

—ありがとうございます。

【感想】

普段聞けないような昔の立守の姿や、立守がどのようにして成長していったかを知ることができた。開学当時からずっと横で立守を支えていらつしやった小森さんの、立守と市民ホールとが協力して守山市を良くしていくという熱い思いが印象的だった。また、小森さんは第三者として立守への意見や課題も言ってくださって、とても響くものがあつた。とても有意義な時間を過ごすことができた。



右… 福井駿斗（聞き手）
左… 小森慎也（語り手）